
私の名を呼ぶまで

剣崎月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の名を呼ぶまで

【著者名】

剣崎月

N3763N

【あらすじ】

とんでもない理由で皇子と結婚することになった【私】冷静になつた皇子は【私】の処遇に困っているようだが、理由が理由なので優しくして差し上げるつもりはない……さて、【私】はどうなるのだろう。

【01】アメリカ・イザベル・シャーロット

「アメリカ、用意はできたか？」

用意はできておりますが、私の名前はアメリカではありません。
皇子にとつてはどうでも良いことじょうがね。

* * * * *

私は小さな国の王女さまに仕えていた。小間使いなどの傍仕えではなく、掃除や洗濯などの力仕事を任されるほんとうの下っ端。私が仕えていた王女さまは、王女さまだつたが目が覚めるような美女とかそういう人ではなかつた。

どんな王女さまだつたのか？ 側で仕えたことがないので分からぬが……向こう見ずな所がある王女さまだつたらしい。そのせいで私はこうして皇子の隣に立つはめになつていい。

王女さまは騎士と恋仲になり、婚約が整つていた皇子との結婚を嫌い駆け落ちした。

まさかそんな事をするとは、王も思つていなかつただろう。

王女さまが駆け落ちするとき、私はたまたまその場に居合わせてしまい、騎士に殴られて失神した。仮にも騎士がか弱い下働きを殴るとは……。

殺されなかつただけありがたいと考えるべきか 手足を縛られ猿ぐつわを噛まされて、暗がりで目覚めた時にまずそう考えて自分を慰めた。

王女さまと騎士が駆け落ちしたのは、皇子が王女さまを妃として迎えにくる前日。

大国の皇子が王女さまを迎えていたからではなく、別の用事があつて、たまたま帰り道に王女さまがいるので連れていくことになつていたのだそうだ。

私は暗がりで”誰か助けて”と考えながら唸る。そこにやつてきたのが王子が連れてきた王女さま付きの侍女。その侍女に助けられ、「どうしてこのような所に?」

当然の質問をされたので、ことの経緯を告げた。

その時私は、王女さまが騎士と駆け落ちしたことを知らなかつた。最後の逢瀬くらいに考えていた。それはそうだろう、王女さまが嫁ぐ先は大国で、下手な行動をとれば国が危ない」とくらい私でも分かる。

分かつていいはずなのに駆け落ちをしたのだ。

閉じ込められていた私は知らなかつたが、王たちは王女さまの代理を立てていた。もちろん王子には教えずに、顔や雰囲気が似ている従妹の姫を王女ということにして。

皇子は王女さまに興味がなかつたので、従妹とすげ変わつたことに気付はしなかつたらしい。まさか王が従妹とは言え、偽の王女を妃として送りだすとは思つていなかつたこともある。上手く誤魔化せそうだったのだが、そこに侍女が私を連れて乗り込んだ。

侍女の言葉に青くなる従妹の姫、そして王。

睨んでくる王女さまの乳母に、大臣とか、とか。

室内は緊迫し、そして私は皇子の国に身柄を拘束された。殺される恐れもあるから……とのこと。

結局事実が明るみに出て、皇子は激怒した。

王が謀つたことを怒つたのか、王女が駆け落ちしたことを怒つたのか？ 侍女は皇子が怒つた理由は王が謀つたからだと言つた。

王女が駆け落ちしたことを正直に告げ、その上で従妹の姫を「従妹の姫」として紹介し、妃にするように勧めたら皇子は怒らなかつたと。

王は娘である王女が駆け落ちしたことに激怒したと考えていたらしく。

皇子のプライドに傷をつけたと。両方だつたのかもしれない。ともかく怒った皇子と、怒りを鎮めて欲しい王。そして皇子は常軌を逸した行動をとつた。

「イザベルを妃として迎える!」

イザベルって誰やねん? と思つたのだが、皇子の指は私を示していた。よくよく考えたら、あの場に下働きの私が連れていかれた時点でおかしいわけだ。

王としては下働き一人で皇子の怒りが収まるのならば安いとか……拒否できる立場ではないので私は皇子の妃になることが決定した。

国民は驚いていた。私だって驚いている。結婚するのは王女さまだと誰もが思つていたのだから。驚きと情報不足からひどい噂が立つた……皇子の国に到着してから知つた。

皇子が私に一目惚れをし、様々な苦難を乗り越えて國へと自ら迎えにきた と。

この残念過ぎる容姿の私に大国の美貌の皇子が恋したとか……信用されないだろうと思つたのだが、そういう話が好きな人が一定数いるようで、その一定数に非常に声が大きい人たちが含まれていたらしく、皇子が恋した町娘という不思議なポジションに収まることになつてしまつた。

* * * * *

私は非常に普通の顔立ちをしている。
どのくらい普通の顔立ちをしているかといふと、

「シャーロット」

皇子が名前を覚えられないくらいに普通の顔立ちである。隣にいるあの時助けてくれた侍女が曖昧な表情をする。

彼女、最初の頃は「皇子もすぐに名前を覚えますので」「皇子は名前を覚えるのが苦手で」とフォローしていたのだが、さすがにそれも言えなくなる程に皇子は私の名を間違つ。

覚えて欲しいと思ったことはないのだが、覚えないと彼女の胃にきそうだなと思うのでできることなら覚えて欲しい。

私が積極的に動くつもりはないが。

皇子は私と会話することはない。一方的に告げて立ち去る。

共通の話題もなにもない私にどうてはありがたい。私は隣国の皇子のことなど詳しく知らない。名前すら知らなかつたくらいだ。

いま私が皇子について知つていることと言えば、皇子には兄と弟がいる。この三人兄弟と従兄弟の公子さんの四名の誰かが次の皇帝になる。最有力候補が皇子なのだと。

侍女は、

「皇子が皇帝に立つた暁には、皇后ですよ」

言われるが、なりたくはない。

だが残念なことに私は皇子の正式な妃である。

どうも本当は違う人が正式な妃にしようとしていたらしいのだが、あの騒ぎでこの状況。皇子が正式な妃にしようとしていた女性は、側室の誰かだつた……らしい。

伝聞ばかりなので”らしい”が続くが、詳しく知ったところどうにもならないので”らしい”だけで充分。

どうしようもない理由で皇子の妃となつた私、そして皇子には側室がたくさんいる。側室には私の故国よりもずっと大きな国の姫さまもいる。

「どうしてあなたみたいな、普通の娘が妃に選ばれたのかしら」

”それは憤怒を拗らせた結果です”とも言えないでの、私は黙つ

て俯く。泣いているのではなく、笑いたくなる気持ちを抑えるために。

大国の姫さまからはわざわざ足を運んで嫌味を言つてもらえるくらいには嫌われている。私は正妃で、皇子の妃のなかではもっとも身分が高いので、大国の姫さまが出向かなければ会うこともないのでも、こうやって頑張つてやつて来てくださる。

生産的なことに時間を費やしたらいかがですか？　思うが、側室の生産的なことは、夜のお勤めだけで、あとは消費行動のみだ。高い陶器のティー・セットに、紅茶の葉に、小麦粉と砂糖と卵で鍊成した毎回違う菓子に、果物と砂糖を鍋にぶちこんでじろじろと見てかき混ぜたものなど。

私、紅茶より珈琲のほうが好きなんですねれどね。

大国の姫さまが嫌味のつもりで言つてている台詞は、皇子からも聞いている。

「あの時自分はどうにかしていた」
言わなくてもいいです。それは私も侍女も思つてのことですか
ら。

【〇二】シユザンナ

皇子が冷静になつても周囲はなかなか冷静にはなれないよつです。でも周囲を責めることはできませんよね。悪いのは皇子ですから。

「シユザンナ」

シユザンナって誰やね?

「お前の故国から側室^{サイジム}がやつてくる」

……どうやら私のことのようです。まあ皇子がこの部屋で話しかけるのは私が侍女だけで、侍女はシユザンナではないので私以外はありえないのですが、呼ばれていると気付けないので「？」となり、口を挟む機会を失う。

それにしても私の名前、そんなに覚え辛い名前じゃないんですけど……皇子に覚えて欲しいと思はしないので、それはそれで良いのですが。

故国からやつてくるのは従妹の姫。王女さまの代役に選ばれた方がやつてくるとか。

従妹の姫さまにこの地位を譲れと? それは良いですねと思つたのですが、どうやらそうではなさそうでした。

ただ来ることを教えただけ。そして部屋を出て行きます。皇子の思うところが分からぬので私は黙つて見送りです。

することがない暇な私は、後宮を観察するのが日課になりつつあります。側室の方々の生活を見ていると、とても真面目。

どの側室も読書家でいらしゃつて、宝石よりもドレスよりも本のほうが良いのだそうで。舞踏会など開かれず、眞実家で政治などの学問を教え込まれ、贅沢は敵だと育てられ。後宮つて想像よりもずっと地味だなと呟くと、

「一時期流行ったんですよ」

侍女が笑いながら教えてくれた。

ここ五十年くらい王の心を射止める女性は「小国の姫。女騎士。侍女。取り立てて美人ではない。読書好き。派手な物には興味がない。質素儉約。控え目あるいは男勝り。剣が使える。知性派」そして何より重要なのは【皇后になるつもりなんてありません】という態度なのだそうだ。

貴族や王族も馬鹿ではないので、ならば王の心を射止めるために娘を「そのように」育てるとして……結果、後宮は下手をする以下町よりもぼそとした感じになつていて、

全体として地味。私の故郷よりも地味。

だつて誰一人としてお茶会なんて開かず、ただ黙々と土いじりをしたり、本を読んだり……」これは修道院ですか？と言いたくなるような静けさ。

侍女も以前は一人に十数名つけられていたのだが、質素を尊び気付いたら一人に一人。

物語に登場するような華やかな世界ではない。

私の所にわざわざ嫌味を言いに来た大国の姫はかなり浮いている模様だ。こんなぼそとした所で氣を張つていると思うと少し勞りたくなるので、私は今日も大国の姫から悪口を黙つて聞く。

私の名前をしつかりと覚えている大国の姫の悪口を聞きながら思つたことは、皇子のお母さまも地味な人だったのかなあ？

大国の姫が帰つてから、侍女から流行りの「選ばれる女性」について、詳しく聞いてみた。

「お妃さまは”沿つた”御方ですよ。元侍女ですし……」

私は元侍女で取り立てて美人じゃないものね。言葉を濁したことについては聞かなかつたことにしておく。

そうか私と皇子の噂が広まったのは、流行りに沿っていたからなんだ。世の中の夢見る少女にとっては歓迎るべきことなのかもしないが、私にとっては迷惑な風潮だ。

ついでと言つては駄目なのだろうけれども、皇子の生母も”沿つた”人だったのかと尋ねたところ、

「お美しい方だったそうです。美貌を王が認めて側室に」

おや？ 綺麗なのか。

だがどうやら美人は三日で飽きるを王が地でやつてしまつたようだ、連れてきて数度手を出してあとは放置、そして生まれたのが皇子。

「美人はいつも平凡顔を恐れています」

なんとも大変なことだ。貴族さまたちの世界がそんなことになつていたとは知らなかつた。

……でも、何となく解つた。王女さまが側室の一人になれたのは、顔が普通で小国の人姫だったからだ！ なんと失礼な……失礼なのは私が。

パーティーが開かれ私も出席することに。その会場にいたのは、これもまた地味なご夫人方だった。どの方も知的さを前面に出し、数名は男装していたりと……。

私一人だけもの凄い豪華なドレスで、目立つて仕方がなかつた。そうか王が地味目な普通顔で眞面目を選ぶから、家臣もそれにならつてこうなるんだ。恐いなあ。

その会場で一人すごく綺麗な女性を見かけた。

他のご夫人方のようにシンプルな地味な色のドレスを着て壁際に立つている方。綺麗な黒髪に白い肌に、銀色のこれもシンプルなネットクレスが映えて、本当に美人だつた。

パーティーが終了し部屋えと戻つてから侍女に、あの人は誰かと尋ねたら侯爵令嬢なのだそつだが……綺麗なので嫁の貰い手がないと。

「正確に言いますと、侯爵が”どうせ嫁いでも、後からきた身分の低い不細工に追い出されるのだからどこへも嫁がせぬ”と仰って、結婚させてもられないそうです」

どんだけ平凡顔の読書家質素信仰が浸透しているのだ。

「今の所身分の低い者は美しい女性を妻にしていますが、美しい妻”女を見る目がないと言われる世の中なので、出来る限り普通で地味目で散財を嫌う女性を欲しがりますね」

そう教えてくれる侍女の顔を見る。侍女は美人と普通の中間くらい。

後宮で良い人を見つけるのは、ちょっと難しいかも知れない。

うわー見えないとこりでしてくださいよ、皇子

侍女と話を終えて寝る準備をして出窓に座つて風景を見ていたら、皇子と侯爵令嬢が抱き合つている姿を発見。

見えるところで逢い引き中なので、かぶりつきで見させてもらいますよ皇子

木が生い茂つて隠れるに適していると思つてゐるのだろうが、私の部屋寝室からは丸見え。せつかくなので下世話に窓に張り付いて二人の逢瀬を凝視する。

月明かりの下、美貌の男女が抱き合つている姿は絵になる。女性のほうが涙を流しながら抱きつくさまは、私が憧れた世界そのもの。一人は離れ難そうにキスをして、その場を去つた。いつの間にか背後にいた侍女も私同様、窓にかぶりつき。

「身分も家柄も問題ありませんが、美人ですからねえ」
可哀相過ぎる。

「なにより皇子はお妃さまを迎えたので………侯爵は許さないで
しょう」

私が普通だから美しい侯爵令嬢では勝てないと言つことですね。
過去、どれほどの美女が地味女に敗北したのか？ 想像するだけで
怖ろしい。

皇子のことはまったく尊敬申し上げていない自業自得だとは思え
ど、少しだけ憐れには感じた。恋した相手が美人だから妻に出来な
いだなんて。

【03】ベッセニア・ペネロペ・シャキラ・カンテラス・ユリアーネ・エスメ

気付いたら故国から従妹の姫さまが後宮入りしていました。

「こんな場合はお茶会に呼ぶべきなのだろうか？

「……話を聞いていらっしゃいますの？ 貧しい家柄の出のお妃には、話が難し過ぎたかしら？」

大国の姫は呼ばなくても一田おきにやつてくれるものの、

大国の姫の故国の自慢話ばかりですので、難しくはありません。でも”難しくない”と訂正する気にもなれませんし。

しかし今日も今日とて元気な方だ。

話は尽きないようでなので語らせておくが、私は暇なので目の前の大國の姫を観察してみることにする。

大国の姫、身長は私より高くて、体重は見た目だけでは解らない。細からず太からず、ぐびれるところはぐびれ、出るべきところは出ている。ただしお尻は解らない。椅子に座っている時に後ろ側に回るわけにもいかないし、妃として頂点に立っているので彼女の後ろを付いて歩くこともない。

大国の姫らしく、肌は白くて透き通るようで顔の作りも上品。

綺麗というのなら侯爵令嬢ですが、可愛らしさがあるのはこの大国の姫。全員を知っている訳ではないけれど、後宮にいる側室の中でもつとも可憐で美しい……美しい？あれ？

どの国もこぞって不細工を後宮に送り込んできているのなら、この大国の姫の容姿は異質だ。

いつも聞いている素振りでまったく聞いていなかつた話に耳を傾ける。なにか重要な事が聞けるか？と思つたが、そんなことはなかつた。

解つたのは四人姉妹の次女だけ。もう少し、実のある話ををして欲しいものです。

「ヘッセニア」

侍女も私もヘッセニアという名ではありませんよ皇子。一人とも一文字も名前かすつてませんって。

皇子の適当さ加減を蔑みつつ、話を聞くこと。

皇子も私と話などしたくはないでしょうが、なにせ皇子の寝室は私の部屋を通り抜けないと辿り着けないと作りになつてるので、どうしても顔を合わせることになる。

無視して通り過ぎてくれて構わないのですが、声をかけてくる。声をかける前に、名前を覚えてこい！……別に言いたいわけではない。適当に覚えておくといいと思います皇子。

私は皇子と食事中。

後宮で食事を取る場合は、妃の部屋以外は禁止なのだそうですよ。無言のまま皇子と食事するのは構わないのですが、

「なにか聞きたいことなどあるか？」

初めて話題を欲しいと話をふられたので、大国の姫について聞いてみた。

「知らん。あの女のところには通わないつもりだ。あの女もその条件に納得して後宮にきたはずだ」

触れないのに側室？

皇子が部屋に戻つてから侍女に何か知つていることはないか？
聞いてみたら、知りたいことは侍女が全部知つていた。

「四人姉妹のなかでもつとも美人な方です。美人なのでご両親である大国の王も嫁に出す気はなかつたようですが、本人が希望してやつてきました。ご本人が美人だから許したのでしょう。当国とは同盟関係にありますし、跡継ぎが生まれたほうが問題になりますから、このまま何事も無く手折られない側室のまま終わるのは確定ですね」

可憐な美人なのに可哀相なことで。とにかく問題があるってどういう事だろう?

* * * * *

「継承権を持った子が外国で誕生すると厄介ですからね」

私の部屋にやつてきた皇子の従兄が、大国の姫が触れられない理由を噛み砕いて教えてくれた。

本日いきなり挨拶に来て、そのまま居座つて茶を所望した従兄殿。話すこともないのだが、なにか話さないと帰りそうにもなかつたので聞いてみたのだ。

「貴方はご自分が元侍女であることを気にしているのですか？　後宮は基本身分のない女に入る場所ですし、下手に身分のある姫が子を産むと王位継承権が複雑になるので、誰も良い顔をしません。私は陛下の姉を母に持ち皇位継承権を持つております。同じことが後宮でも言えます。後宮に姫を入れて、その方が子を産むと当国の皇位継承権と他国の王位継承権を持つた子が誕生するのです。その子が他国へと帰り王位を継いで、当国に跡取りが生まれなかつたらどうなります？　他国から来てもらわなければならなくなるのです。その方が側室の子でしたら国内に残っている私のような立場の者を戴くことも可能ですが、正妃の子であつたら他国にいる王子のほうが継承順位は上になりますから」

美形だが”気障”な感じのする従兄殿は話続ける。

「大国相手ですとぶつかりますが、小国相手でしたら後継者を得た時点で簡単に併呑できますから。物語が小国の姫や侍女が多いのは、利害関係上、大国の姫は後宮入りしないからです。後宮にいるのは小国の姫や侍女が圧倒的に多いので、必然的に正妃は後ろ盾の弱い

女性になります。ですからお妃が言われた彼女は、かなり浮いています。彼女以外の容姿が優れていないペネロペ王女やシャキラ王女、カンデラス王女がやつてきた所で同じことでしょう」「う

従兄殿は私の質問に答えてから、

「明日お迎えにあがりますので」

有無を言わせずに言い、招待状を私に握らせて去つていった。

私は彼の見送りもそこそこに招待状を開き”なんの招待状なのか？”を確認する。

皇帝夫妻からの招待状だった……彼、これを届ける使者だったのか。なんてよく喋る使者なんだ。

夜半にやつてきた皇子に招待状を見せて、どうするべきかを尋ねた。皇子は眉をつり上げて舌打ちをしたが、

「拒否はできないな……明日か。私が用意はさせておく、ユリアーネ」

招待は受けことになった。

そして私の名前はユリアーネじゃないって。名前、本当にかかりもしない。ついでに皇子に大国の姫とその姉妹の名を聞いたら、「ペネロペ、シャキラ、カンデラスだ。後宮にいるのはエスマエラルダ。それがどうした？ ユリアーネ」

間違えずに答えやがった。

皇子は名前を覚えられない病氣かと思っていたが、どうやらそれは我だけに対してかかる病氣のようですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3763z/>

私の名を呼ぶまで

2011年12月21日12時55分発行